共同利用・共同研究課題「チベット・ヒマラヤ牧畜文化論の構築―民俗語彙の体系的比較にもとづいて―」(2022 年度第 3 回研究会)

2023 年 3 月 26 日(土曜日)　10-19 時、ハイブリッド開催（会議室 306）

今年度、第 3 回目となる研究会では、2 件の発表と質疑応答・情報提供、1 件の合評会、論集原稿に関する報告を行った。

長岡発表では、ヒマーラヤ地域におけるチベット医学の薬用植物シャクナゲと牧畜文化との関わりについて報告された。シャクナゲは、チベット医学の薬として病気の治療に用いられてきたとのことであった。発表では、牧畜生活において、シャクナゲの痙攣毒を活用した多様な利用が広くみられることが指摘され、乳製品や日用品、儀礼、食事、民間療法の事例やチベット医学の知識との関連性が示された。質疑では、シャクナゲが乳製品の腐敗防止（抗菌）に用いられるとする場合、発酵を止めてしまうのではないかということや、染色の利用についてもとらえる必要があるとの指摘があった。

西田発表では、敦煌出土チベット語文書中にみえる動物供犠について紹介された。動物供犠はいずれも葬儀に係る文脈で行われていたようで、動物の主な役割は死者の道ゆきの伴となることであった。発表では、葬儀の前例譚や動物供犠の洗礼譚とされる文献群の構成と各構成要素の具体例が示され、馬とゾーモの二種の供犠獣に関してそれぞれの特徴が示された。質疑では、供犠に供される動物が野生であるとした場合の野生の定義や、西田の発表では「供儀」とされているが「供犠」とすべきだという指摘があった。

当日のプログラムは以下のようである。

発表 1:
長岡慶「ヒマーラヤにおける薬用植物と牧畜文化―シャクナゲの利用に注目して」

発表 2：
西田愛「古代チベットの葬儀における動物供儀」

チョウ・ピンピン著『チベット高原に花咲く糞文化』合評会

論集原稿に関する報告：
平田昌弘「乳文化についての民俗語彙の体系的地域間比較」

星泉「チベット高原におけるチーズの多様性を探る：チベット・ヒマラヤ牧畜農耕資源データベースにもとづいて」

海老原志穂「野生植物の食利用からみた東北チベット牧畜地域における食文化―ツェコ県の事例を中心に」

チョウピンピン「生態と象徴の視点から考えるチベット遊牧民にとってのヤクの糞」

別所裕介「チベット高原における窒息殺の文化的卓越性―隣接集団の技法との地域的偏差に着目して―」

岩田啓介「17-18 世紀ダライ = ラマ政権下モンゴル・チベット間交通における家畜管理―駱駝利用を中心として―」

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.